

「五時通信 ―人々へ、十年後の私へ―」について

毎月十日の 五時 を意識するようになってから気付いたのだけれど、この日のこの時刻に何をしていたかと振り返ってみると、大抵の場合ロッカーの前で着替えをしているか、そうでなければ病院の門を出て大船駅への道を歩き始めている。この時刻にまだ働いていることはほとんどない。

十日に限らないで過ぎた日々をズラリと並べておいて 五時 でスパッと切って切り口を見ると、仕事であることも勿論あるけれど、その仕事も何かひと区切りついたか、つきそうだと多い。手術ならもう店仕舞いで皮膚を縫っているとか、麻酔から覚醒させようとしているとか、白衣を脱ぐ前に病棟で患者か家族ともう一度言葉を交わしているとか、要するに永年の勤務医暮らしが習い性となって五時という気持ちも行動も事態収束の方向で、新たに何かを始めようという時刻ではない。紙なら余白か折り目みたいな時刻である。

毎月十日五時の状況報告という硬直した条件をかたくに守ろうとすると「通信」は長続きしないと思う。他の何時でもない五時という時刻の特異なことに加えて、連続した流れのある一日の暮らしのうち、ある瞬間を五時で切り取ることにこだわると、かえって冗長な状況説明が必要になるのが煩わしく、のびのび書けなくなるから。少なくとも私はそうだ。

こうして書いていることが「人々へ、十年後の私へ」意味を持って伝えられるためには、五時という瞬間ではなくてもっと漠然とした、拡張された時間の中の状況なり感想なりが、例えば今日この頃の暮らしの中で思うこと・・・という風に書かれるのでなければ、内容が先細りの貧弱なものにしかならないと思う。

それで、私は五時という時刻は一応の手がかりに過ぎないと考えたい。

実際、全国に散らばった「五時通信」同人の通信を読ませて頂くと、諸兄弟方は五時という時刻にそれほど拘泥してはおられないのに、その集積は日本をある時点で輪切りにして観測した記録になっていると私には思われる。

「中国の一日」(平凡社刊)という本がある。

一九三六年五月二十一日という何でもない ある日 の中国人の、さまざまな年齢、階層、職業の人々の一日の生活を記録集積してみること、その織り成し方を明らかにしようとした本である。時間軸に従って縦に描写した歴史ではなくて、いわばある時点で横に輪切りにした中国を描こうとしたのである。「五時通信」の狙いもまさにそこにあって「通

信」は日本人の暮らしの「輪切り観測」そのものと私は考えている。

実は「中国の一日」が革命前の中国ではなくて「日本の一日」であつたら個人的には更に興味が深いのにと思う。他でもなく一九三六年五月といえばまさに自分の誕生した特別の「時点」であるから。

それはとにかく、輪切りの手がかりに過ぎない時刻ではあつても、自分はいつも帰り支度ばかりしているというのでは、何となく後ろ向きで弱々しく、書き難い。ところが八四年十二月十日はまだ手術をしている。六時間もかかる手術をしている。これを手がかりにすれば書くことは沢山あるとそう思った。しかし、書きかけてみると状況説明がどうしても長くなってタイプして下さる方に申し訳ない、読んで下さる方にも迷惑であろう。しかし状況、事情を説明しないで書いて発生してきた感情、感想をひとに解つて貰うウデは私には無い・・・これはもう少し勉強してからでなければ・・・と今回もサボることにしました。

(竜頭蛇尾！結局これが結論とは・・・)

明けましておめでとございます。

正月の休みには一回分くらい通信を書くことと思つておりましたが、いざとりかかるとやっぱり書けなくて別紙の如き言い訳になりました(それにしても威張つていますネ)。

自分でボツにしようかと思いましたが、そうすると通信ゼロが続くので、それも申しわけなく、言い訳も一種の通信と考え直して同封します。今年も宜しく願ひします。

(五時通信 第一一二号 一九八五年二月十日)